

# 慶良間諸島の沖縄戦

慶良間諸島は、渡嘉敷島、前島、座間味島、阿嘉島、慶留間島、屋嘉比島、久場島、など大小 20 余の島々からなり、渡嘉敷村と座間味村に分かれています。昔「群れ島」と呼ばれたこの美しい島々も、沖縄戦で多くの血が流された島として、歴史に刻まれています。

日本軍は、沖縄本島に上陸してくる米軍の背後から奇襲攻撃をかけるねらいで、慶良間の島々に海上特攻艇 200 隻をしのばせていました。ところが、予想に反して米軍の攻略部隊は、1945 年 3 月 23 日、数百の艦艇で慶良間諸島に砲爆撃を行い、ついに 3 月 26 日には座間味の島々へ、3 月 27 日には渡嘉敷島にも上陸、占領し、沖縄本島上陸作戦の補給基地として確保しました。

物量に劣る日本軍の特攻部隊と住民は、山の中に逃げこみました。パニック状態におちいった人々は避難の場所を失い、島北端の北山(ニシヤマ)に追いつめられ、3 月 28 日、集団を組んで自決しました。手榴弾、小銃、かま、くわ、かみそりなどを持っている者はまだいい方で、武器も刃物もちあわせのない者は、縄で親兄弟の首を絞めたり、首を吊ったり、この世のできごととは思えない凄惨な光景の中で、自ら生命を断っていったのです。

## 大東亜戦争及び沖縄戦における本村関係者全戦没者数

このデータは、加除、正誤(錯誤)訂正等により数値が増減する場合があります。

区 分		戦没者数 2008/3/1 現在	遺族援護法適用該 当者数 (公簿確認数)	備 考
本土出身将兵		81 柱		香川県 9、愛知県 9、兵庫県 7、静岡県 6...他
渡 嘉 敷 村 他	軍人・軍属	91 柱	91 柱	軍人・軍属 91 人は全員島外に於いて戦没
	防衛隊	42 柱	38 柱	戦没者数と一致しないのは、申告により刻銘した者を除くため
	一般住民	380 柱	353 柱	
	小 計	513 柱	482 柱	
戦没者合計		594 柱		
韓国・朝鮮人		10 柱	参考...公簿無し氏名不詳	

戦没者数は公簿により確認した戦没者と申出により刻銘した戦没者の合計

公簿とは村保存の 遺族援護法適用該当者名簿、 陸軍・海軍戦没者名簿を言う。



### 集団自決

狭小なる沖縄周辺の離島において、米軍が上陸直前又は上陸直後に警備隊長は日頃の計画に基づいて島民を一箇所に集合を命じ「住民は男、女老若を問わず軍と共に行動し、いやしくも敵に降伏することなく各自所持する手榴弾を以て対抗できる処までは対抗し癒々と言う時にはいさぎよく死に花を咲かせ」と自決命令を下したために住民はその命をそのまま信じ集団自決をなしたるものである。

集団自決の地域 座間味島 昭 20.3.26 座間味村  
渡嘉敷島 昭 20.3.28 渡嘉敷村



(沖縄県生活福祉部援護課：戦闘参加者概要表より)

## 戦争体験記

『10・10 空襲と戦場になった島』 字渡嘉敷 小嶺 幸信（当時 14 歳）

10・10 空襲の時は、学校に行っていましたね、本校舎は日本軍に接收されていて、北山(ニシヤマ)のふもとに、イーシノモーという所で、地番は、小嶺後原で、そこに仮校舎を 3 棟ほど造りました。

その日の朝、学校に行く前に、兵隊と一緒に海岸に行ったら、あそこ（那覇の方角）から、四六時中飛行機が飛びまわってくるので、不思議に思って私たちは、見に行っただけです。

上等兵の話では、「友軍の演習だから、なんでもない、心配するな」と、いう事だったので、学校に行っただけです。

「どうも状況が悪い」と、いう事で、先生と一緒に、僕ら最上級生が 4、5 人、海岸の様子を見に行く途中、あまりにも飛行機が、低空していくもんだから、おかしいなと、思ったら、爆弾を 3 発か 4 発落とされて、それからですよ、「本物の空襲だ」と、騒ぎ出したのは。それで、一応学校にもどって、先生に引率されて家に帰り、各自の避難壕に隠れました。

私たちが引率したのは、崎間という男の先生でした。

うちの壕は阿波連に行く途中の田んぼの向こう側で、部落から離れた一番南の端に掘ってありました。

そこは、母の実家の親爺、私の祖父が掘った壕で、私達も一緒に入りました。

その時は、1 日だけの空襲で、やられたのは、艦船が 3 隻ですか、亡くなった人もいます。

陸上には、あまり被害はなかったですよ。

次の年の 3 月 23 日の空襲の時は、「アメリカの機動部隊が沖縄に向かっている、空襲があるらしい」と、情報が前もって知らされていたので、私たちは、空襲の始まる前から壕に入っていました。

前の年の 10 月 10 日の空襲の経験で、どうせ 1 日で終わるだろうからと、食糧もたいして準備せずに壕に入ったら、もう、やり方がひどいんですね、10・10 空襲の時は、船が狙われただけでしたが、今度は、3 日間ぶっつけで、家も山も爆弾で焼かれたわけです。

経験のある人がいっていましたね。“これは、上陸まちがない、4 日目から艦砲射撃が始まって、上陸の準備だ”と、いっていました。

それで、昼はバンバンやって壕から出られないから、夜、飛行機の来襲がおさまると、その時、食糧を運び入れました。

また、壕の周囲は、芋を植えてあったから、まず食糧は心配なかった、調味料さえ持っていれば大丈夫だった。

壕には、母の両親と、祖父母（私の曾祖父母）と母の実家の嫁さんと、子ども 2 人（私の従兄弟）の 7 名と、私たちの家族 4 名を加えて 11 名。

四六時中、壕に入っているのではなく、空襲のない時は、壕の近くに仮小屋を作ってあったから、そこで暮らし、空襲がはじまると、壕に逃げ込む生活でした。

アメリカが上陸するまでは、西側（部落の）壕にいたが、その夜（26 日）防衛隊が「敵が上陸して危険だから移動しろ」と、いう事で、一応南側の山に避難した。

筋道(シジミチ)山で一晩すごしました。そこから見える慶良間海峡には、軍艦がいっぱい並んでいるのが見えて、もうそこら辺りにも敵は入りこんでいるなと思って、また、部落に降りて北山に行った。

その日は、だいぶ雨が降って、母の両親は、もう年で歩くこともできない状態で、じいさんばあさんに「あんたたちは、若いから、出来るだけ命を永らえるようにしなさいよ」と、いわれ、別れました。

その夜、北山の、今、玉砕場とよばれている所についた。

僕らは、手榴弾なんか持ってなかったけれど、隣りに座っていた人たちや他の人たちは持っている人もいた。親戚 同志で集まり座っていた。

僕らは、夜明け前に着いたが、夜が明けてから村の人たちが、どんどん避難してきた。どこから命令があったのか知らないけど、みんな集まって来るから、僕は、そこが安全な避難場所だとばかり思っていた。

誰が音頭をとったか知らないが、"天皇陛下バンザイ"と三唱やった事を覚えている。

しばらくして、母が、振子のような"カッチ、カッチ"と、いう音を聞いて同時に、あっちこっちで爆発しはじめ、僕らは、びっくりしてうつぶせになった。

やがて、静かになったと思って顔をあげると、周りは、血だらけで倒れている人、死んでいる人でいっぱいだった。

僕らの家族、おばの家族と母の兄弟の子どもたち7名全員無事だった。

その後は、ごろごろ死んでいる人、傷を受けた人たちは、ものすごい悲鳴をあげている。ここに居たら大変だ、と怖くなって、川の下流の方に逃げていった。

川下は、ちょっと安全な場所だったから、そこで日が暮れるのを待ち、自分たちの元の壕に戻ろうという事になった。

元の壕に戻るには、山の地形で、もう一ぺん玉砕場を通らなければならないし、暗闇のなかを、倒れている(死んでいる)人たちの間を、手さぐり、足さぐりで通って、北山の頂上まで登り、そこから尾根を越えて南側に降りていったら泉があるので、そこで一晩すごした。

そこには、島の東の海岸にいた人たちが避難していた。2日間、食べ物もなく、水だけ飲んで山を登ったり、降りたりして、3日目にやっと元の壕に戻る事が出来た。上陸したアメリカ軍は、一ぺん船にもどり、日本兵が、だいが生き残っている事を知ったかどうか、再上陸して来た。アメリカ軍が再上陸しない前は、部落を出歩く事も自由で、山羊や羊、豚を捕まえてはつづし、食事もそんなに不自由しなかったが、生き物も捕りつくし、仔山羊なんか捕まえて、壕の近くで飼ったりもしていた。

再上陸の後は、ずーっとアメリカ軍は居続けて、部落に降りる事も出来ない状態になった。

しばらくして、伊江島の人たちが入って来て、アメリカ軍は、部落内にテントを張り、陣地を構え、伊江島の人たちの保護をしながら、時どき斥候を出して、山に登って機関銃を射ったりするものだから、おじいさんの掘った壕にも居られなくなり、山の中に、新しい壕を掘って、終戦まで生活していた。

食べ物は、底をついて、芋も掘りつくしたが、かずらを植える余裕もないし、ソテツを倒して、デンプン採ったり、野草を食べたり、ソテツは、5月頃から食べはじめていたでしょうね。

夜になると、ソテツを倒しに行ったが、その頃、アメリカ軍は、あっちこっちに地雷を埋めてあって、それを踏んで死んだ人もたくさんいる。

稲が植えてあったから、穂を摘んで、一升ビンで精米して、ソテツを混ぜて食べましたね、あれは、だいが助かった。

たまたま米軍の船が特攻機にやられた時など、缶詰、メリケン粉、卵の粉、コンビーフ、ビスケット、野菜缶などが、海岸に流れてきたのを、夜になって採りに行ったりもした。

慶良間海峡のアリガーという所は、よく漂流物が着くところだったが、年配の人たちが採りに行って、アメリカの軍艦から攻撃されて、やられた人もいる。

みんな命からがら逃げ帰ったり、食べ物あさりも命がけで、結局はそういう状態が8月まで続いて……

アメリカ人と、最初に出会った人は、"芋掘りをしているところを捕まったが、別に撲ったり、乱暴されたりもしなかった"という情報が入ったりしているところに、島の防衛隊が、斥候に出て、アメリカ人の監視哨を突破して、部落内に入り込んで、伊江島の人たちをびっくりさせたいが、伊江島の人たちの話では、アメリカ人は、何にも危害を加えない、食糧もくると、いう話が伝わって来た。僕らは、山にいて食べる物もない、このままだと死んでしまう、それより山を降りようと、集団で(8月)17、18日に山を降りた。

しかし、日本兵が監視しているから、そこを突破しないと、降りられないし、芋掘りに行くんだと、嘘をついて、部落の反対側に夜おりて行ったら、アメリカ人が待っていた。

あっちこっちの山から、3日くらいで全部おりてきたようだった。

部落内の残っていた家には、伊江島の人に住みついているので、山羊小屋に床を張ったり、アメリカテントに集団（数家族）で入ったりした。

最初に捕虜になったのは、郵便局長の一家だね。

長男は、手を引いて歩けるくらい、長女は、アリガーの山によくソテツを採りに行っていた。いつものように、ソテツを採りに行くところを、待ちかまえていたアメリカに捕えられて、一家3名とも捕まったという情報が流れてきた。また、局長の姉さんが、玉砕場で負傷しているところをアメリカに助けられ、座間味で治療をうけて元気になり、島にもどってきていたらしい。

その時、米軍のことをいろいろ話して、それから、あの人（局長の姉さん）は、連絡係をやっていたかも知れない。

局長は、子どもを抱えているから、山に登って説得なんか出来なかったんじゃないか。

母の実家は、北山に行った時、別れて壕に残したつもりだけど、どういうわけか追いついて来て、手榴弾の爆発のとばっちりで、当時3歳の一番末の女の子を残して全滅した。

（渡嘉敷村史資料編より）



渡嘉敷島北部の山並

### 北山(ニシヤマ)

渡嘉敷島「青少年交流の家」の宿泊棟西側、約250mに位置する標高208.2mの山で、頂には聖地「西御嶽」がある。



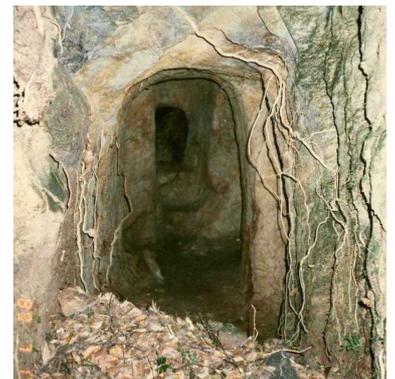
北山(ニシヤマ)と赤松隊本部壕



陣地のあった谷間



壕の跡



壕の内部